

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：27101
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2009～2012
 課題番号：21330120
 研究課題名（和文） 移民の流入と統合過程－在日韓国・朝鮮人と日系ブラジル人の世代間生活史の比較分析
 研究課題名（英文） The Influx of Immigrants into Japan and Their Social Integration Process: A comparative analysis of Life-histories of Korean Families and Japanese-Brazilian Families
 研究代表者
 稲月 正（INAZUKI TADASHI）
 北九州市立大学基盤教育センター・教授
 研究者番号：30223225

研究成果の概要（和文）：在日韓国・朝鮮人と日系ブラジル人との生活史の比較分析からは、(1)「移民」第1世代の多くは周辺部労働市場に組み込まれたこと、(2)しかし、移住システム、資本主義の形態などの違いが社会関係資本の形成に差をもたらし、それらが職業的地位達成過程や民族関係（統合）の形成過程に影響を与えた可能性があること、などが示されつつある。また、在日韓国・朝鮮人の生活史パネル調査からは、(1)1990年代後半時点でも見られた祖先祭祀の簡素化やエスニシティの変化が進んでいること、(2)その一方で「継承」されたエスニシティの持続性自体は強いこと、などが示された。

研究成果の概要（英文）：

This study aims at finding some patterns of the influx of immigrants into Japan and their social integration process through a comparative analysis of life-histories of Korean families and Japanese-Brazilian families. We get some findings as follows:

- (1) the first generation of both immigrants were mostly incorporated into the peripheral labor market,
 (2) the type of international migration system caused some differences concerning the content and amount of social capital. Those differences affected the status attainment process and inter-ethnic relations among each immigrant group, and
 (3) the diversification of the Korean families' life-structure has brought about the change in their ethnicity, while we can still find that they keep Korean ethnicity which has been inherited from their families.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2010年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2011年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2012年度	2,100,000	630,000	2,730,000
総計	14,200,000	4,260,000	18,460,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：民族関係、在日韓国・朝鮮人、日系ブラジル人、生活史、エスニシティ、ライフヒストリー、生活構造

1. 研究開始当初の背景

1980年代後半以降の定住外国人の増加と

統合政策の不在といった状況の下、政策実践的志向も内包しつつ、日本の民族関係研究は

蓄積されてきた。そこにはいくつかの潮流がある。その一つが、〈生活構造論的アプローチ〉による都市エスニシティ研究である。その際の主要な特徴は世代間生活史法の採用であった。世代間生活史法を定式化した谷富夫によれば、それは個人の生活史をある家族・親族の構成員について体系的に収集・分析する、ライフコース研究の手法である。〈生活構造論的アプローチ〉では、世代間生活史法の採用によって、民族関係やエスニシティが家族を通して代的に形成・継承・変容されるメカニズムを分析することができる。

谷富夫を代表とした研究会では1990年代後半に在日韓国・朝鮮人の世代間生活史の聞き取り調査を行ったが、その後、世代交代もすすんでいる。他方、在日韓国・朝鮮人と類似した在留資格をもつ日系ブラジル人の日本での生活の構造化も進展しており、その家族に対しても、世代間生活史の聞き取りが可能であると私たちは判断した。かくして、在日韓国・朝鮮人の家族・親族ならびに日系ブラジル人の家族・親族に対する世代間生活史の比較分析を行うという着想を得たのである。

さらに、本研究に影響を与えたのは、国際社会学からの〈構造論的アプローチ〉である。『顔の见えない定住化』(2005)において、梶田孝道・丹野清人・樋口直人は、グローバル化のもとで編成された「市場-国家-移民ネットワーク」によって日系ブラジル人の階層的地位と社会関係資本のあり方が規定されるプロセスを明らかにした。この〈構造論的アプローチ〉に接し、私たちは、(1)国境を越えた移住システム、(2)資本主義世界経済と接合している地域の経済過程、(3)多文化共生・統合政策と関連する地域の政治過程、(4)両過程を媒介する生活構造を総合的に記述・説明する必要性を強く認識した。かくして、本研究では、民族関係研究における〈生活構造論的アプローチ〉と〈構造論的アプローチ〉の接合を志向した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本における民族関係の形成と変容に関する中範囲理論の構築である。そのため、在留資格において類似した地位をもち家族で定住・永住している在日韓国・朝鮮人と日系ブラジル人を分析対象とし、その移住システム、生活構造、日本人社会との民族関係を比較することによって、日本社会における民族関係形成メカニズムをトータルに把握することをめざした。

このような目的の下、研究期間内に目指したのは以下の点である。

(1)理論面では、国際労働力移動ならびにエスニシティ論について整理し、〈生活構造論

的アプローチ〉と〈構造論的アプローチ〉を接合した民族関係研究の分析枠組を提示する。

(2)実証面では以下の3点をめざした。

①在日韓国・朝鮮人(朝鮮半島からの労働者)と日系ブラジル人について移住システムの比較分析を行い、「移民」がどのような形で地域の労働市場への組み込まれたのかを明らかにする。

②在日韓国・朝鮮人と日系ブラジル人の世代間生活史に示された生活構造(広義の民族関係)の形成・変容過程の比較分析を行い、それらが日本社会との関係(狭義の民族関係)にどのように関連しているのかを明らかにする。

③前回(1990年代後半)調査したに在日韓国・朝鮮人家族への生活史の聞き取りから、個人のライフステージや生活構造の変化がエスニシティの持続と変容にどのような影響を与えているかを明らかにする。

④政令市ならびに外国籍人口比率が相対的に高い自治体における多文化共生施策を調査し、前回(1990年代後半)調査時との政策変化とその要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)理論的整理と分析枠組みの設定は以下の方法で行った。

①まず、国際労働力移動に関する理論的整理である。申請者らの研究グループは、エスニシティや民族関係の形成・持続・変容を生活構造に注目して分析してきた。しかし、移民が階層・地域構造へどのような形で組み込まれるかは雇用システムや移住システムによって決定されることが指摘されている。在日韓国・朝鮮人、日系ブラジル人の民族関係の形成・継承・変容メカニズムを比較する場合、移住システムに関する理論的整理が必要となる。

②次に、民族関係の形成・持続・変容に関する理論的整理である。参考にしたのは、谷富夫編著『民族関係における結合と分離』(2002)、梶田孝道・丹野清人・樋口直人著『顔の见えない定住化』(2005)、小内透・酒井恵真編著『日系ブラジル人の定住化と地域社会の変化』(2001)などである。また、分析枠組みの形成にあたっては、産業都市の構造分析研究も参考にした。ただし、産業都市の構造分析研究において分析の主眼となっていたのは、経済の二重構造の下での階級(クラス)と政治的行為との関連であり、民族(エスニシティ)は考慮されていなかった。しかし、民族と階級とは重なり合って社会経済的地位を決定する。グローバル化が進む中、上記の研究をレビューすることによって、エスニシティの形成と民族関係との関連を総合的に把握できるような理論枠組を目指し

た。

(2) 実証的研究は以下の方法で行った。

①まず、平成8～10年度科学研究費補助金(基盤研究A)「民族関係における結合と分離の社会的メカニズム」(研究代表者:谷富夫)で聞き取りを行った京阪神地区在住の在日韓国・朝鮮人家族員への世代間生活史の再聞き取り(パネル調査)を行った。聞き取り項目等は、前回の科研費調査に基本的には準拠した。

②日系ブラジル人家族について、これまで本研究会メンバーが行ってきた調査のインフォーマントを中心に世代間生活史の聞き取りを行った。主な調査対象地は、愛知県西尾市、広島県呉市である。

③日系ブラジル人の移住システムの把握と世代間生活史の聞き取りのため、ブラジル・サンパウロ市とアラサツバ市での聞き取り調査を行った。

④日系ブラジル人の生活構造と民族関係の把握のため、滋賀県長浜市において調査票を用いた量的調査を行った。質問文は、平成14～17年度科学研究費補助金(基盤研究A)「エスニック・コミュニティの比較都市社会学」(研究代表者:西村雄郎)で用いた調査票に基本的には準拠した。

⑤政令市(仙台市、京都市、神戸市、広島市、北九州市、福岡市)ならびに外国籍人口比率が相対的に高い自治体(沖縄市、太田市・大泉町)を対象として多文化共生施策を調査した。調査項目は、「人口」、「新しい在留資格制度(制度の周知や窓口での対応など)」、「子どもの教育(外国籍児童・生徒への支援の内容、民族教育や国際理解教育の実施など)」、「社会教育、コミュニティ活動(外国籍住民向けの社会教育講座の実施状況、多言語情報の提供、地域の外国籍住民の相談員等としての活用など)」、「労働(外国人相談窓口の設置、就業環境の改善など)」、「住宅・居住(公営住宅入居案内、相談窓口の設置など)」、「保健・医療(医療情報の提供など)」、「福祉(無年金者への救済措置、生活困窮者への支援状況など)」、「女性の緊急保護」、「自治体行政への参加・政治参加(外国籍住民の意見を地域の施策に反映させる仕組みの導入など)」、「その他(公共施設等での外国語表示、外国語で対応できる職員配置、多文化共生に関する調査の実施状況、外国籍住民支援組織や自助組織等の支援など)」である。

4. 研究成果

研究期間内に16回の研究会を開催した。分析は継続中であるが、現時点で明らかになりつつあるのは以下の点である。

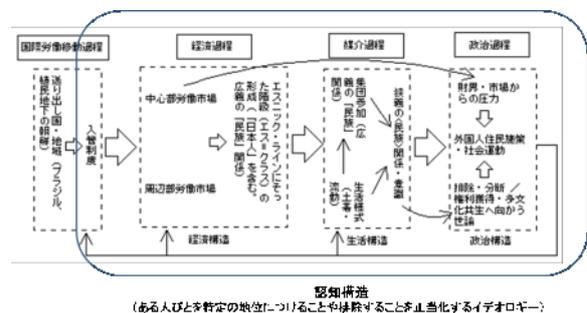
(1) 分析枠組みに関して

上記の通り、本研究では構造論と生活構造論とを接合した分析枠組みの形成を考えた。理論的整理を踏まえ、以下のような基本指針を得た。

①「移民」の流入時の社会経済的地位を基本的に規定するものとして、資本主義の段階、国家の「移民」政策、移住システムを位置づける。

②行為論と構造論とを架橋するものとして構造化論を位置づける。民族関係は構造的に規定されると同時に、行為実践による関係形成によって地域での構造的枠組みも変化する。そうした民族関係の変容や維持を媒介するものとして生活構造を位置づける。

③このような基本指針の下、以下のような分析枠組みを設定した。



(2) 在日韓国・朝鮮人と日系ブラジル人の世代間生活史の民族間比較に関して

日系ブラジル人の世代間生活史の分析は十分には進んでいない。その上で、仮説的に以下の知見を提示する。

①戦前・戦中期であれ1990年代のグローバル資本主義期であれ、「移民」第1世代の多くは周辺部労働市場に組み込まれた。

②しかし、移住システム、資本主義の形態、国際関係的な状況の違いなどから、在日韓国・朝鮮人と日系ブラジル人とでは同じエスニック集団の中での社会関係資本の形成や生活構造に差が生じているように思われる。戦前期に朝鮮半島から大阪都市圏に流入してきた「移民」第1世代も、1990年代の日系ブラジル人と同様、相対的に流動性が高かった。しかし「相互扶助型」移住システムに基づく社会関係資本の蓄積(「家族主義」、「相互主義」の基盤)、金属・ゴム加工などニッチ的製造業への参入可能性の高さや戦後の国際情勢による日本での生活継続見込みの高さ(「自力主義」の基盤)等によって、在日韓国・朝鮮人の場合、自営業の上昇移動が可能となった。

③在日韓国・朝鮮人の場合、そうした上昇移動は教育達成を梃子にした専門自営(医師、会計士など)への世代間上昇移動をも可能にした。

④日系ブラジル人の場合、『顔の見えない定

住化』で指摘されているように「市場媒介型」移住システムや流動性の高さによって社会関係資本の形成があまり見られず、自営の上昇移動も顕著には見られない。ただし、「自力主義」的な教育達成に基づく大企業ホワイトカラーへの世代間移動も見られた。

⑤在日韓国・朝鮮人、日系ブラジル人ともに、学校、地域、職場などの集団内での社会関係の形成・蓄積（広義の民族関係）によって統合的な民族関係（狭義の民族関係）が形成されているように思われる。

⑥ただし、日系ブラジル人の場合、労働問題（解雇など）に対して個人的に対応しなければならぬケースも見られた。構造的に民族団体が形成されにくいことも、その背後にはあると考えられる。

(3) 在日韓国・朝鮮人の世代間生活史の時系列比較（パネル調査）に関して

①前回科研調査（1990年代後半）でも見られた儒教的祖先祭祀の簡素化や私事化がさらに進んでいる。また、キリスト教信仰を中心とした家族・親族結合が見られた家族においても、家族および民族という紐帯から個々人の親密性へと相互扶助原理の変化が見られる（ただし、相互扶助自体は維持されている）。

②個人のライフステージ上の位置の変化、階層移動や地域移動にともなう生活構造の変化にともなってエスニシティにも変化が生じるケースが見られた。

③同時に（変容しつつも）家族を通して「継承」されたエスニシティの持続性自体は強いことが示された。

(4) 自治体の多文化共生施策について

①前回科研調査時（1990年代後半）と比べると各自治体で多文化共生施策の展開が見られる。

②情報提供などに関する施策の充実が見られる一方で、労働問題や生活困窮に対する支援が相対的に弱いように思われる。

③日系ブラジル人等いわゆる「ニューカマーズ」向けの施策については、当事者や支援団体の運動と施策との関連はあまり見られない。

本研究で得られたデータをもとに今後とも分析を継続する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

①山本かほり、在日韓国・朝鮮人の生活史にみる「民族」の継承と変容－在日韓国・朝鮮人の家族・親族単位の世代間生活史調査

より、社会分析、査読無、40号、2013、81-103

②高畑幸、大都市の繁華街と移民女性一名古屋市中区栄東地区のフィリピンコミュニティは何を変えたか、社会学評論、査読有、Vol. 62, No. 4、2012、504-520

③近藤敏夫、地域社会における日系ブラジル人の生活－滋賀県長浜市における居住形態と今後の課題、人権と部落問題、査読無、No. 811、2011、29-37

④山ノ内裕子、逆境を生き抜く一日系ブラジル人の移動と教育戦略、年報 教育の境界、査読有、No. 7、2010、15-25

⑤谷富夫、東アジア大都市の外国人労働者と民族関係、創造都市と社会包摂－文化多様性・市民知・まちづくり、査読無、2009、253-265

〔学会発表〕（計 17 件）

①谷富夫、都市とエスニシティ－人口減少社会の入り口に立って、日本都市社会学会、2012年9月9日、立教大学

②山本かほり、山口博史、松宮朝、大谷かがり、近藤敏夫、経済不況下における在日日系ブラジル人の実体及び社会統合への課題、よこはま国際フォーラム 2012、2012年2月12日、JICA 横浜・海外移住資料館

③稲月正、在日韓国・朝鮮人におけるエスニシティの変容(1)分析枠組みと調査対象者の概要、日本社会分析学会、2011年12月17日、香川大学

④山本かほり、在日韓国・朝鮮人におけるエスニシティの変容(2)「成長期・定住世代」の生活史から、日本社会分析学会、2011年12月17日、香川大学

⑤TANI Tomio、Female Migrants' Social Adjustment in Japan、International Seminar on City and Life: Comparative Studies of Society and Space in Japan and Korea、2011年1月14日、University of Seoul, Seoul, The Republic of Korea

⑥稲月正、民族関係研究における分析枠組みについて、日本社会分析学会、2010年12月19日、宮崎大学

⑦TANI Tomio、Family, Religion and Society for Female Migrants: Their Social Adjustment Process in Japan、International Conference on Female Life Course in a Globalizing Society、2010年9月30日、National Chengchi University, Taipei, Taiwan

⑧山ノ内裕子、トランスミグラーントとしての日系ブラジル人児童生徒、日本比較教育学会、2010年6月27日、神戸大学

⑨稲月正、在日韓国・朝鮮人におけるエスニック文化の世代間継承について、日本社会分析学会、2009年12月19日、九州大学

- ⑩NIKAIDO Yuko、Living Under a Foreign Sky : A First Generation Korean Woman in Japan and Herr Family、アメリカ人類学会東アジア部会研究大会、2009年7月2日、台湾中央研究院民族学研究所（台湾）

〔図書〕（計8件）

- ①吉田亮（編著）、不二出版、『アメリカ日系二世と越境教育－1930年代を主にして』、212、256、（野入直美「ハワイ沖縄系2世の就学体験－帰米2世のライフヒストリーを中心に」、担当215-239）
- ②三田千代子（編著）、上智大学出版、『グローバル化の中で生きるとは－日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』、2011、321、（山ノ内裕子「日系ブラジル人の移動とアイデンティティ形成－学校教育とのかかわりから」、担当181-193）
- ③森岡清志（編著）、放送大学教育振興会、『都市社会の社会学』、2012、236、（稲月正「都市社会のエスニック関係」、担当197-212）
- ④谷富夫・芦田徹郎編、ミネルヴァ書房、『よくわかる質的社会調査－技法編』、2009、224（谷富夫「Ⅱ質的調査の考え方」、担当16-29／野入直美「Ⅶライフヒストリー分析」、担当90-105）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲月 正 (INAZUKI TADASHI)
北九州市立大学・基盤教育センター・教授
研究者番号：30223225

(2) 研究分担者

- 谷 富夫 (TANI TOMIO)
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：30135040
- 西村 雄郎 (NISHIMURA TAKEO)
広島大学・総合科学研究科・教授
研究者番号：50164588
- 近藤 敏夫 (KONDO TOSHIO)
佛教大学・社会学部・教授
研究者番号：70225621
- 西田 芳正 (NISHIDA YOSHIMASA)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：10254450
- 山本 かほり (YAMAMOTO KAORI)
愛知県立大学・公私立大学の部局等・准教授
研究者番号：30295571
- 野入 直美 (NOIRI NAOMI)
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号：90264465
- 二階堂 裕子 (NIKAIDO YUKO)
ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授

授

- 研究者番号：30382005
- 高畑 幸 (TAKAHATA SACHI)
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：50382007
- 山ノ内 裕子 (YAMANOUCHI YUKO)
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：00388414
- 内田 龍史 (UCHIDA RYUJI)
尚絅学院大学・公私立大学の部局等・講師
研究者番号：60515394
- 妻木 進吾 (TSUMAKI SHINGO)
目白大学・社会学部・講師
研究者番号：60514883
- 堤 圭史郎 (TSUTSUMI KEISHIRO)
福岡県立大学・人間社会学部・講師
研究者番号：70514826

(3) 連携研究者

- 中西 尋子 (NAKANISHI HIROKO)
関西学院大学・社会学部・非常勤講師